

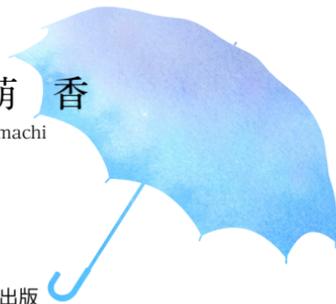
雨のあとに
君と
デートする



京町萌香

Moeka Kyoumachi

青山ライフ出版



夕方から降り出した雨が、夜には本降りとなってきた。雨が降ると、この時期ひんやりとした空気に包まれる。夏も終わりに近づく。雨の後に夏と秋の空気が入れ替わり、秋の気配を感じるのかもしれない。

桜井洋一は、神楽坂の通りを入ったかくれんぼ横丁にある、こじんまりとしたいきつけの居酒屋で1人酒を飲んでた。会社の同期である西島悟が一足先に店を出て、30分ほどたっていた。

洋一の会社は、神楽坂の坂を上り、赤城神社の横を下ったところにある。この辺りは西五軒町と呼ばれる場所だった。主に法規集や実務書籍を出版している会社だ。今日は課長の転勤に伴う送別会があった。一次会の後に西島を誘い1杯飲もうという流れになった。西島とは入社以来の友人だった。お互いに酒好きというところで意気投合した仲だった。西島にはプライベートな相談もしていた。西島はすでに結婚していて2人の子持ちだ。だから、なんだかんだいつでも帰宅が早い。洋一のように一人酒などしないのであろう。

一次会でかなり飲んだせいとか、西島の帰ったあと一気に酔いが回ってきた気がする。1ヶ月ほど前になるだろうか。5年ほど付き合った和代からいきなり別れを切り出された。理由は見合いをした相手とたぶん結婚するからというのだった。

和代とは結婚の口約束も、ましては婚約もしていないのだから、それは破棄という言葉で終わるといっわけではなかった。しかし洋一の心の中では、いつかこの先和代と一緒になってもいいと考えて

いた。和代は10月で35才になる。洋一はすでに今年40才になっていた。今までもよく週末には洋一のマンションに来たものだった。そして洋一の好物の料理を作ってくれたのだった。

洋一からは具体的に言葉で「結婚しよう」と和代には告げていなかった気がする。それでも相手はわかってくれていると勝手に思っていたところが甘かった。それではだめらしい。35才になる和代は、はっきりした確かな答えを望んでいたのかもしれない。

和代が見合いをした相手は洋一より少し若い40前の男だった。総合商社に勤める男で、次男とまで和代は告げた。すでにシカゴに転勤が決まっており、一緒に来てほしいと言われたらしい。いとも簡単に和代は決断したのだろうか。すでに和代とは価値観も違っている気さえた。どこかで和代は平穏で安定した生活に心惹かれていたに違いない。そういう女だったとしか思うより他なかった。

「そうか結婚するのか……」

和代は海外に住みたいとよく言ってたよね。

そういう人が現れたってことか」

「洋一は私と結婚しなかった？　そういうことって今まで一度も口にしなかったでしょ？　事実私ももう若くないし……」

「俺？　結婚かあ、しばらくこのままの状態がいいと思っていたよ」

「……そうなのね。本気ではあまり考えてくれてなかったのね。わかったわ。じゃ洋一も幸せになっ